

# 実習の評価からみる 人間福祉学科介護実習の実態について

—施設評価と自己評価を通して考える—

由 田 美 津 子  
吉 藤 郁

## 1. はじめに

介護福祉士の養成は来るべき超高齢社会における高齢者・障害者のケアのマンパワーとして期待が高まっている。2000年度からの新カリキュラムでは従来の施設介護実習に加え、通所介護実習、訪問介護実習が加わり、内容が強化された。実習展開では、学生の能動的な実習態度と行動が重要であるが、学生の意欲の顕著な個人差が存在すること、介護福祉士養成の歴史が浅く、カリキュラムデザインや教育方法の確立が不十分で、いまだ手探りの状態にある。

他方、付属実習施設をもたない養成校では、既存の社会福祉施設・医療施設等で実習を行っていることから、実習環境の課題も多い。北陸学院短期大学人間福祉学科では、石川県下の介護老人福祉施設、介護老人保健施設、重症心身障害児施設など5類型、31施設で実習を行っている。このため、実習施設における教育環境も多様であり、各施設にお願いしている実習指導者の教育能力も多様性に富んでいる。これらの実習施設での教育環境とスタッフの教育能力を高めることが重要ではあるが、施設の指導者を研修会等へ参加要請をする場合、研修資金の提供や施設側の派遣承諾を得るのは難しい状況にある。このため、学生、実習指導者、実習巡回担当教員それぞれが介護実習の目標と到達状況について、自己評価、他己評価を行い、それら結果の分析から学生の自主的な学習意欲を高める環境を整えていくことが大切だと考えられる。

本研究は、本学科開設年度(1999年)から2003年度まで5年間の介護実習における施設指導者の評価(以後施設評価と略す)について総括と振り返りを行うとともに、2002年度・2003年度入学学生の介護実習における自己評価(以後自己評価と略す)をもとに、学生の傾向と、施設指導者の評価に関する傾向を知り、今後の実習指導の一助にしたいと考え行なったものである。

これら一連の研究過程の中で明らかになった若干の知見について報告する。

## 2. 本学における介護実習のカリキュラムデザイン

本学の介護実習は、講義、演習、学内実習指導の進度に応じて2年間で10週間(450時間)、4つの段階で行っており、各実習で教員が3～4ヶ所の施設を受もち週2回の巡回指導を行っている。各段階の時間、目的は以下の通りである。

〈介護実習Ⅰ〉(7月下旬から2週間): コミュニケーションが比較的可能な利用者との人間的ふ

れあいを通して、施設利用者の生活と介護の実際について知る。ここでは、施設で行われている介護技術の説明・見学・実施を通じて、介護とはいったいどういうものであるかを体験するとともに、職業としての介護福祉士を考える第一歩として位置付けている。

〈介護実習Ⅱ〉（2月下旬から2週間）：生活障害の程度が高い利用者を理解し、介護ニーズ把握と障害レベルに応じた介護方法について理解し実践する。ここでは、実習Ⅰの施設全般を知るといった段階から、1人の利用者の現在の状態と介護内容について情報収集を行うことによって、介護行為の具体的な根拠をさぐることを目的としている。

〈介護実習Ⅲ〉（7月下旬から3週間）：施設運営のプログラムに参加し、処遇全般について学ぶとともに、ケアプラン作成及びチームの一員としての介護業務を総合的に学ぶ。在宅介護のあり方について学ぶ。ここでは、利用者の現在の状態から様々な情報を加え分析し考えられる解決すべき課題を導き出し、それに対する目標をたて、介護計画の実施を行う。これらを通じて、介護を行う際には、科学的で具体的な根拠が必要であることを学ぶ。

〈介護実習Ⅳ〉（9月下旬から3週間）：施設運営のプログラムに参加しチームの一員としての介護業務を総合的に学ぶ。個別介護過程展開、記録方法を経験する。施設の運営管理、家庭との連絡調整、他機関との連携の理解及び訪問介護、通所介護の実際を体験する。ここでは、実習Ⅲと同様、介護過程の展開を通じて、介護福祉における人間性と科学性を学ぶことを目的としている。

### 3. 研究方法

自己評価については、人間福祉学科2002年度入学生（4回生）は、実習Ⅱ終了時である3月、実習Ⅲ終了時である8月、実習Ⅳ終了時である11月、2003年度入学生（5回生）は、実習Ⅰ終了時である10月にそれぞれ自己評価を行った。

自己評価項目及び評価内容は、実習Ⅰ・Ⅱについては、技術（介護に必要な基礎的な技術が習得できている）、実習態度（言葉遣い、身だしなみ、礼儀、積極性、責任感がある）、対人関係（利用者との接し方、話し方、聴く姿勢ができている）、利用者の理解（利用者像の理解と介護ニーズの把握ができる）、チームワーク（協調性があり、実習生に必要な役割分担の認識がある）、記録・報告（適切な報告及び記録ができる。適切な表現力があり、提出期日の遵守ができる）、資質（専門職としての自覚をもち、福祉職への適性がある）の7項目について評価をしてもらった。評価の段階は、A：大変良い、B：普通、C：少し努力が必要、D：できていない、である。実習Ⅲ・Ⅳの自己評価項目は、実習Ⅰ・Ⅱとほぼ同一であるが、利用者の理解の項目が、利用者ニーズの把握と必要な介護になり、内容は、利用者の個別性及び介護ニーズの把握とケアプランの理解ができているに変更している。尚、自己評価項目及び内容は施設評価と同一のものを使用している。

他者評価として、実習段階毎に施設の指導者に依頼し、学生の実習内容を所定の評価表により評価してもらったものを用いた。これを施設評価として1999年度～2003年度入学生までの評価表の集計・分析を行ったものである。なお評価は、各項目A：B：C：Dで評価されるが、これにA（10）B（8）C（6）D（4）の配点をして、個人得点を算出している。7項目すべてがAの評価の場合70

点となる。また本学科では、他者評価のうち施設評価には70点を、教員評価には30点を配分して総合的に評価点を出す方法をとっている。

教員評価の30点の評価項目内訳は、実習の諸記録の内容及び巡回指導時の所見である。この2項目を加えて総合評価を行っている。今回は教員評価を除き、1～3回生までは施設評価に焦点をあてデータ分析を行い、4～5回生については、施設評価と自己評価の比較から両者の傾向を探った。

また、自己評価表の自由記述の中から、特に介護技術項目の記述を取り上げ、技術修得に関する学生の意識傾向を見た。データ分析の視点及び方法は以下のとおりである。

- (1) 年度別、実習段階毎に評価得点の上位から a (60～70) b (50～59) c (49以下) の3群に分類し、各群の特性と施設評価の傾向を探る。
- (2) 平均的な学生像と思われる3回生の施設評価から評価項目別の履修状況と実習段階推移による評価の実態を探る。
- (3) 施設評価と自己評価を(1)同様に3群に分類して、比較検討し、両者間の相違点と各群の特徴を見る。
- (4) 施設評価と自己評価を評価項目別に比較検討し、得点分布から各項目の到達度や、実習段階別で変化が見られるか。また、両者間の評価の相違について見る。
- (5) 各実習段階の技術の項目について、自己評価の自由記述を KJ 法により分類し、自分がどの程度できたかの習得意識の分析から、介護技術像の変化を見る。

尚、学生には、自己評価表に関して、実習指導のあり方を考える研究資料として使用すること、個人が特定されることはないことを説明し、了解を得ている。

#### 4. 結果および考察

- (1) 各年度のうち、2回生と3回生の施設評価をもとに、実習段階毎に評価得点の上位から a (60～70) b (50～59) c (49以下) の3群に分類し、各群に属する学生の構成比と評価得点分布から群の特性をみるとともに、実習段階毎の変化をみるために表1を作成し内容を分析した。

また分類作業を行う中で、明らかになった実習施設との関連についても一部言及する。(表1参照)

実習段階別 a・b・c 群の評価得点分布 (表1)

2回生

群別		a 群 (60～70)					b 群 (50～59)					c 群 (49以下)				
	n	構成比	A	B	C	D	構成比	A	B	C	D	構成比	A	B	C	D
実習Ⅰ	84	32.1	39.0%	60.8%	0.0%	0	48.8	4.5%	74.9%	20.6%	0	19.1	0	16.1%	83.9%	0.0%
実習Ⅱ	83	38.6	45.5%	50.1%	4.5%	0	48.2	1.8%	77.5%	20.7%	0	13.2	0	29.9%	64.9%	5.2%
実習Ⅲ	80	44.9	41.3%	58.3%	0.4%	0	46.4	5.4%	72.6%	22.0%	0	8.7	0	34.7%	59.2%	6.1%
実習Ⅳ	78	44.9	45.3%	54.7%	0.0%	0	51.3	6.8%	81.1%	12.1%	0	3.8	0	28.6%	71.4%	0.0%

## 3 回生

群別		a 群 (60～70)					b 群 (50～59)					c 群 (49以下)				
	n	構成比	A	B	C	D	構成比	A	B	C	D	構成比	A	B	C	D
実習Ⅰ	72	27.7	28.6%	68.6%	2.8%	0	50.1	3.6%	72.2%	24.2%	0	22.2	0	24.1%	74.1%	1.8%
実習Ⅱ	67	35.8	48.8%	49.4%	1.4%	0	46.3	8.2%	78.3%	13.3%	0	17.9	0	47.6%	44.0%	8.3%
実習Ⅲ	65	40.1	55.5%	44.5%	0.0%	0	46.2	8.0%	73.3%	18.5%	0	13.7	0	20.6%	53.9%	25.4%
実習Ⅳ	65	44.6	56.2%	43.8%	0.0%	0	44.6	6.4%	80.3%	13.3%	0	10.8	0	24.5%	65.3%	10.2%

## a 群の特性

2回生で a 群に属する学生は、介護実習Ⅰ=32.1%、Ⅱ=38.6%、Ⅲ=44.9%、Ⅳ=44.9%となっており、3回生では、介護実習Ⅰ=27.7%、Ⅱ=35.8%、Ⅲ=40.1%、Ⅳ=44.6%となっている。また、2・3回生ともに実習段階が進むにつれ、a 群に入る学生の割合が増加している。

次に評価項目全体の得点率でみると、2回生では、A評価が39%～45.5%でB評価が50.1%～60.8%で、C評価は0～4.5%となっている。3回生では、A評価が28.6%～56.2%でB評価が43.8%～68.6%で、C評価は0～2.8%でとなっている。

これをみると、2回生では、実習段階別のAとBの得点率の大きな変化はみられず、3回生では、実習段階が進むにつれてA評価の得点率の上昇がみられ、逆にB評価は実習Ⅰ～Ⅳに進むにつれ減少しており、成長のあとが見てとれる。

また、a 群の学生の実習先との関連をみると、実習した学生の殆どが、必ずこの a 群に入っている特定の施設が複数認められた。

指導者の評価に対する考え方は様々ではあるが、A評価を出すことが多い指導者の下で実習した学生は、高い評価をもらうことになり、必然的に a 群に入る結果になっている。

## b 群の特性

b 群に属する学生は、2回生では介護実習Ⅰ=48.8%、Ⅱ=48.2%、Ⅲ=46.4%、Ⅳ=51.3%となっており、3回生では、介護実習Ⅰ=50.1%、Ⅱ=46.3%、Ⅲ=46.2%、Ⅳ=44.6%がここに属している。

2・3回生ともに実習段階ごとの構成比の変化は少ないが、3回生では a 群の構成比が増加した分だけ、b 群に属する学生が若干減少している。

評価項目全体の得点率でみると、2回生の b 群は、A評価が1.8%～6.8%でB評価が72.6%～81.1%で、C評価は12.1%～22 %となっている。3回生では、A評価が3.6%～6.4%でB評価が72.2%～80.3%で、C評価は13.3%～24.2%で、D評価は2・3回生ともに0である。これらの b 群学生の得点分布から、大まかにA評価が6%と少なく、B評価が76%、C評価が18%で構成される集団であることがわかる。学生の約半数がこの b 群に属し、a 群へ移行する学生の減と努力の結果 c 群から b に移行できた学生の増を包含する性質をもっていることがわかる。

また、b 群の学生の実習先との関係をみると、実習した学生の殆どが、必ずこの群に入る特定の施設が複数認められる。特に実習生の受け入れ数が多い施設で、評価者と現場実習の指導担当が異なり且つ一定していない場合など、評価責任者は、学生個々の動きが見えにくいこともあり、どの学生にもオール b の評価を出す場合が見受けられる。結果として、これらの施設で実習した学生は必然的に b 群に属する結果となっている。

### c 群の特性

2 回生で c 群に属する学生は、介護実習Ⅰ=19.1%、Ⅱ=13.2%、Ⅲ=8.7%、Ⅳ=3.8%となっており、3 回生では、介護実習Ⅰ=22.2%、Ⅱ=17.9%、Ⅲ=13.7%、Ⅳ=10.8%がここに属している。

2・3 回生ともに実習段階が進むにつれ、b 群へ移行する学生が増え、構成比は確実に減少し、学生の努力の結果が数値として示されている。

評価項目全体の得点率でみると、2・3 回生ともに c 群では、A 評価は 0 % である。2 回生の B 評価が 16.1%~34.7% で、C 評価は 59.2~84.9% で、D 評価が 0~6.1% 含まれる。3 回生では、B 評価が 20.6%~47.6% で、C 評価は 44~74.1% で、D 評価は 1.8~25.4% となっている。

c 群の最大の特徴は、D 評価つまり不可とみなされる評価点をもつ学生が含まれていることにある。また、学生の約 15% がこの群に属し、学生の得点分布は、大まかに見れば B 評価が 30%、C 評価が 65% で D 評価が 5 % で構成される集団といえる。

2 回生では、実習Ⅱ及びⅢで D 評価を受けた者がいるがⅣでは D 評価をもつ者は 0 となった。

3 回生では、実習Ⅲの D 評価が 25% と高いのは、ケアプラン実施の内容未熟等により D 評価をもらう結果になったことによる。また、評価項目の中で D 評価がしやすいのは記録報告・技術・利用者の理解(ケアプラン立案・実施)などである。指導者も、ある項目に不可をつける場合、かなり悩みながら勇気がいる判断をされており、個々の学生の動きがよくみえている場合に限られていることが多い。それだけに学生、教員ともにこの評価を重く受け止め、実習担当教員全員で総合的に判断し、必要な場合は再実習を課す等の方法で実習目標を達成させる指導を行っている。しかし、記録報告等何か 1 項目の D 評価がある場合などは、学内で記録指導を行うことや個別の演習課題を与えて補習するなどの方法を取りながら指導し、実習目標の達成をはかっている。

(2) 平均的な学生像と思われる 3 回生の施設評価から評価項目別の得点分布と実習段階推移による学生の状況を推察するために次の図 1 を作成した。(図 1 参照)

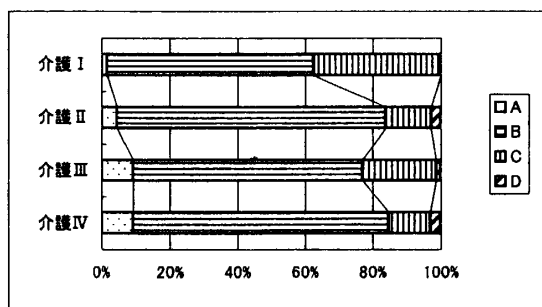
介護実習Ⅰ~Ⅳの評価項目別比較のうち、いずれの回生においても同様な評価パターンをみせる介護技術、記録報告、利用者理解について推察を加えた。

介護技術：介護実習Ⅰ(以下実習Ⅰと略す)から実習Ⅱでの変化は、C 評価が 1/3 に減少し、B 評価に移行したことである。これは、実習Ⅰにおいて、説明・見学のみが主であったが、実習Ⅱでは実施場面が増えたこと、また受け持ち利用者の身体的・精神的状況から介護ニーズを把握することにより、なぜこの介護技術が必要であるか根拠が理解でき始めたからではないかと考えられる。また、学内演習では学生同士で利用者役・介助者役を行っており、実際の要介護者に接する場面が無く実習Ⅰでは戸惑うことが多かったが、実習Ⅱでは、実習Ⅰの経験がある為戸惑うことも少なかったと思われる。実習Ⅲになると、再び C 評価が実習Ⅱの約 1.5 倍に増えている。これは、介護ニーズを充足するための具体的な方法・手順が導き出せず C 評価の増加に繋がったのではないかと考えられる。また、実習Ⅰ~Ⅳを通して他評価項目に比べ、A 評価が最も少ないのも、この介護技術の項目の特徴である。目にみえるものであること、介護現場の指導者が指導し

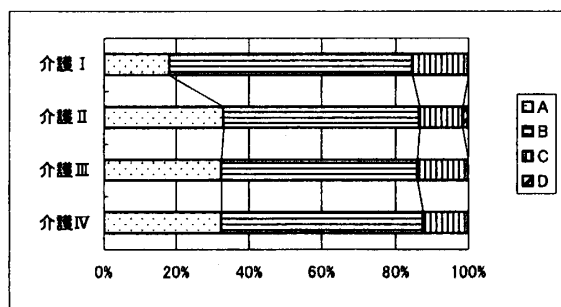
やすいものであること、最終的に期待されるレベルが現場の実践家と同等のものであることから、  
厳しい評価になっていると考えられる。

図1 評価項目別実習評価推移

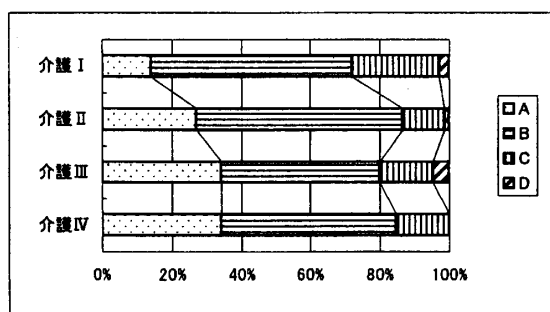
介護技術



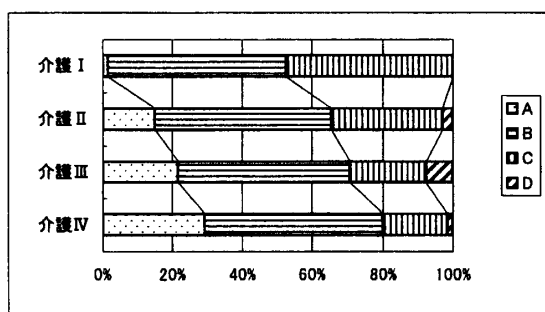
チームワーク



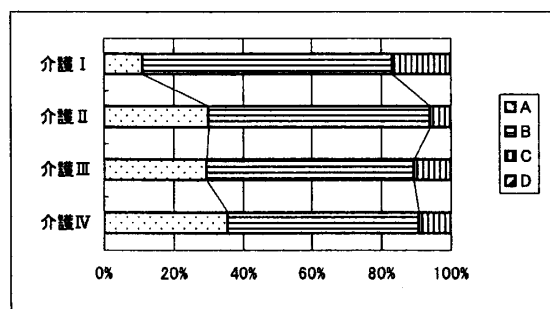
実習態度



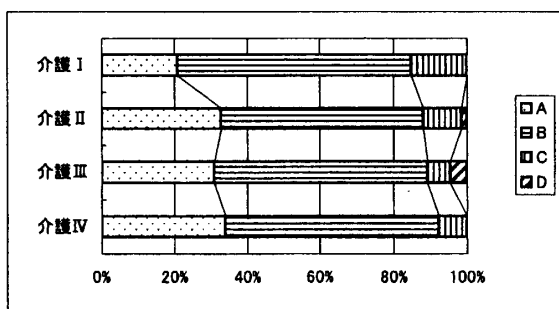
記録報告



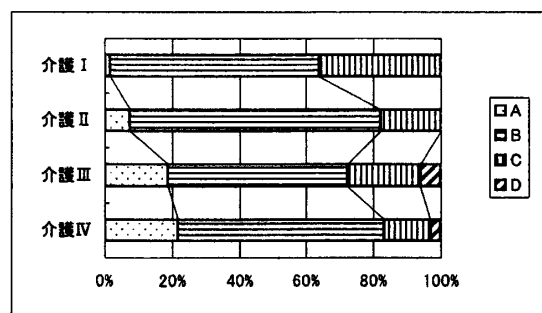
対人関係



資質



利用者の理解



評価基準 A 大変良い C 少し努力が必要  
B 普通 D できていない

介護 I n=72  
介護 II n=67  
介護 III n=65  
介護 IV n=65

記録報告：実習ⅠからⅣに段階を重ねるに従って、A評価は徐々に増加し、C評価は徐々に減少している。また、実習Ⅲ段階では、D評価の増加が顕著である。実習を経るに従って学生の記録報告能力は高まっていること、今までぎりぎり合格(C評価)してきた学生は、専門家として必要な記録報告能力の有無という点で評価がされているということが考えられる。

利用者理解：実習ⅠのC評価(約36%)が、実習Ⅱでは、全体の18%以下に減少し、そのほとんどがB評価へ移動、B評価の学生の一部がA評価へ移動している。そして、実習Ⅲでは、B評価が実習Ⅱに比較し30%減少し、A評価へ移動している。また、C評価は、微増し、D評価がこの項目で初めて出現し全体の約6%を占めている。実習Ⅳになると、C評価が実習Ⅲの2/3となり、B評価・A評価の微増に繋がっている。利用者理解では、実習Ⅰは施設全体の介護が中心で一人一人に目を向けることができなかったのが、実習Ⅱで介護ニーズの把握、実習Ⅲ・Ⅳで介護ニーズから導きだされる課題解決を通して理解度が高まってきていると考えられる。また、実習Ⅰ・Ⅱで、利用者に対して理解を深めることができなかった学生は、結果として実習Ⅲで不合格をもらう結果となっている。

### (3) 施設評価と自己評価を比較検討し、両者間の評価差と各群の特徴を見る。

施設評価と自己評価の比較(表2)

群 別	施設評価平均			自己評価平均			評価差		
	a	b	c	a	b	c	a	b	c
5回生実習Ⅰ	59.7	52.5	45.0	51.2	50.0	49.6	-8.5	-2.7	4.6
4回生実習Ⅰ	61.8	54.3	43.5	55.3	50.6	52.5	-9.3	-3.7	9.0
4回生実習Ⅱ	61.3	54.3	43.6	53.6	53.0	46.6	-8.3	-1.4	2.9
4回生実習Ⅲ	62.8	54.6	45.8	54.1	54.5	47.6	-8.0	-0.2	2.1
4回生実習Ⅳ	64.6	56.1	45.6	54.8	53.4	49.0	-9.8	-2.7	4.0

上記の結果から、a群では、施設評価より平均値で8.5自己評価が低く、b群では施設評価より平均値で2.0程度自己評価が低いあまり差はない。c群では逆に自己評価が施設評価より平均値で4.6高い結果となっている。

a群では、殆どの学生が施設より7～12点低く自己評価をしている。教員の巡回時所見等と合わせ推察すれば、a群の学生は、実習目標の達成度の見極めと自己の能力の認識がかなり明確にできており、控え目に自己評価していると思われる。b群に属する学生は全体の半数と人数が最も多い集団であることから評価差が0～-12点までである個人差も平均化され、全体では評価差が小さくなったこと、また、指導者・学生ともに無難なB評価をつけることが多いため、両者の差が少ないものと思われる。c群からは、施設評価でD評価をもらう者が出るが、自己評価をDとする者は少ない。そのため約5点施設評価より高い。これは、やはり学生の自己認識の甘さとその段階での実習目標が明確になっていない上、達成度の見極めも不十分であることによるのではないと思われる。また、個々の学生で両評価の差が大きい者で、施設より自己評価が高い者については、その理由を確かめ個別の指導を丁寧に行う必要がある。

## (4) 施設評価と自己評価を評価項目別に比較検討してその相違をみる。

ここでは4回生の実習Ⅰ及びⅢを取り上げ施設評価と自己評価を評価項目別に比較してどのような相違がみられるかを検討した結果、以下のことがわかった。(図2・図3参照)

図2 介護実習Ⅰ(4回生)施設・自己評価の比較

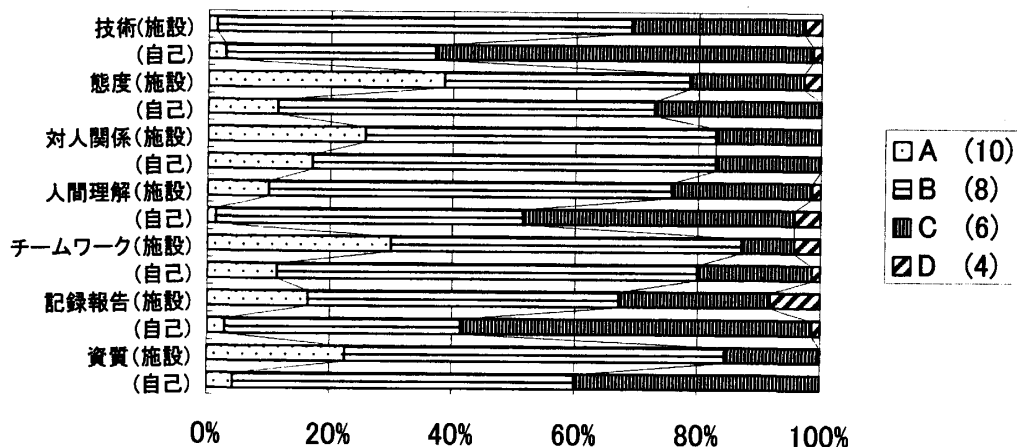
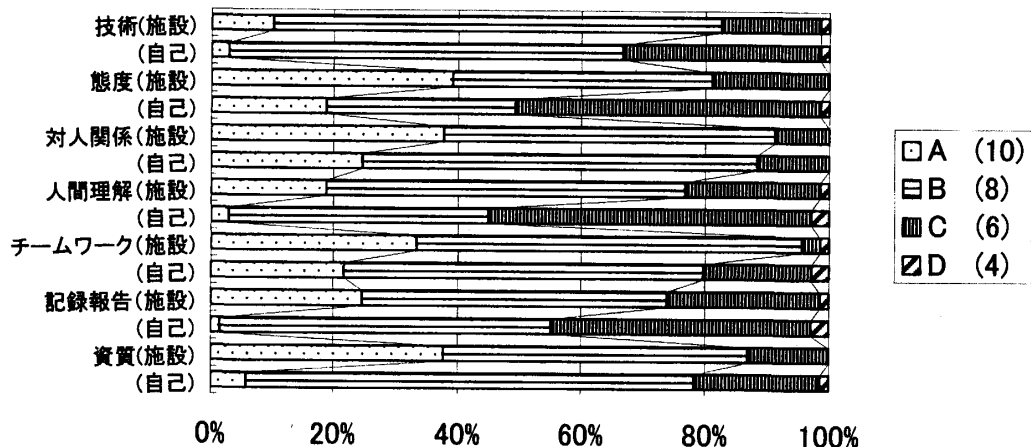


図3 介護実習Ⅲ(4回生)施設・自己評価の比較

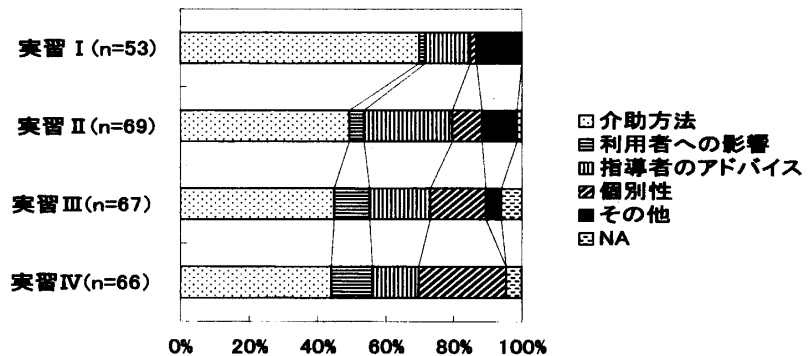


- ①実習Ⅰ及びⅢともにすべての項目で、A評価を出すのは、施設の方が学生より多く、Cと評価するのは逆に施設より学生の方が多い。
- ②両者の一致度が比較的高いのは、対人関係の項目であり、低いのは、実習態度と資質の項目となっている。
- ③実習Ⅰに比べⅢでは、評価項目全てで施設のA評価が高くなり、自己評価もそれに呼応するように若干高くなっている。
- ④実習Ⅰの技術、人間理解、記録報告の項目において、Cと自己評価する者が施設評価の2倍程多い。
- ⑤実習Ⅲの人間理解、記録報告の項目においては、Aと自己評価する者が施設より少なくCと自己評価する者は施設より多い。

(5) 介護技術自己評価における判断の根拠の推移 (図4 参照)

各段階の技術について、どの程度できたのかという問いに対して、学生が自由記述で列举したものを大きく4つのカテゴリーに分けた。介助が必要な場面において、自分のとった方法(行った介護)が自分の判断のみで出来た・出来なかったという面から評価している学生は、実習Iの段階では、70%であったが、

図4 自己評価からみる判断基準



実習段階があがるにつれ、実習IIでは49%、実習IIIでは45%、実習IVでは44%と、特に実習Iと実習IIに大きな差異が見られる。自分のとった介護が利用者にどのような影響を及ぼしたかを考えて技術进行评估している学生は、実習Iでは2%だったが、実習IIでは4%、実習IIIでは10%、実習IVでは12%と、わずかつつではあるが、増加している。また、指導者のアドバイスをもとに実施できたことにより技術进行评估している学生は、実習Iでは、13%だったが、実習IIでは26%、実習IIIでは18%、実習IVでは、14%と推移している。また、基本的な技術は習得できていると考え、利用者の個別性に対応した介護が実施出来た・出来ていないで評価した学生は、実習Iでは2%であったが、実習IIでは9%、実習IIIでは16%、実習IVでは26%に増加している。

学生は、実習Iでは介護技術を行うことが精一杯で、利用者の反応などをみる余裕がなく、また出来ないこと・わからないことに対して指導を受けるという積極的な態度は見られないことが伺われる。しかし、実習段階を重ねることにより、自分の行った介護が適切であったかについて、利用者の反応や実習現場での指導をもとに、自己の技術レベルを判断できるようになり、実習III及びIVでは利用者一人一人にあった介護技術を選択・実施することが必要であると考えている学生が増加している。この学生群は、実践の場で、介護方法の選択肢をもち、それを実施する力を身につけてきたと考えられる。その一方実習IVにおいても、依然自己流の判断で技術の評価をしている学生が、半数近くいる。この学生群は、介護技術に関して、回数をこなし慣れることが習得につながると考えていると思われる。

## 5. まとめ

今回、本学科開設年度より5年間の介護実習における施設指導者の評価について総括とふり返りを行うとともに、在学生(4・5回生)については介護実習における自己評価をもとに、学生の傾向と、指導者の評価に関する傾向を比較しながら検討した結果、確認できたことは以下のことである。これらを、今後の実習指導に活用していきたいと考えている。

実習評価の全体像を把握するために行った施設評価の3群の分類から、各群に占める学生割合及

由 田 美津子 ・ 吉 藤 郁

び、評価得点の分布状況について把握できたこと、これらの実習段階の推移に伴う変化等についても知ることができた。また、作業の過程で、評価と実習先の関係では、実習生が必ずa群に入る特定の施設やb群にのみ入る特定の施設があることがわかった。これらについては、今後その原因や対策について検討し、指導者懇談会等の中で取り上げるなど、より良い評価のあり方を議論していきたいと考えている。

評価項目に関しては、いずれの回生においても、同様な評価パターンをみせるのが介護技術、記録報告、利用者の理解である。その他の項目、チームワーク、実習態度、対人関係、資質は、指導者の評価がさまざまな角度からおこなわれるのが現状である。これは、評価表の指導者のコメントの内容からもそれが伺われる。今後、評価がわかる原因を探り、特にチームワークや資質の評価の視点を明確に示していくことが重要だと考えている。

介護実習は、学生が利用者との関係性の中で、学内で学んだ成果を生かし、学習を深める実践学習の場である。その場で、学生は、自分の行動を評価することにより、学習に必要な手段を見極め、次回の学習に向けての課題を明確にしているものと考えられる。自己評価から浮かび上がってくる判断の根拠に対する指導を重ねることが、次回の意欲的な実習につながり、専門性の高い介護福祉士の養成に不可欠な教育方法であると考えられる。また、適切な自己評価能力を身につけることにより、実習の教育効果が高まると考えられる。

現在、介護実習指導では、自己評価表の記入を行い、別日に施設評価を個人面談の形で伝え、指導をおこなっているが、自己評価と施設評価をあわせて学生の指導にどのように役立てていくか、また、よりよい評価様式及び評価基準の見直しについても今後の課題として取り組んでいきたい。

## 謝辞

この研究にあたり、自己評価表の使用に協力してくれた人間福祉学科1年生及び2年生に感謝いたします。

## 参考文献

- 介護実習ガイドブック：北陸学院短期大学人間福祉学科 2003
- クリストフ・アンドレ、フランソワ・ルロール著『自己評価の心理学』紀伊国屋書店 2000
- 柴田益恵：介護福祉実習の自己評価に関する一考察、介護福祉教育 No. 16、31－35、2003
- 花子紀子、金子眞由美、玉井妙子：基礎看護実習が今後の実習意欲に与える影響、第34回日本看護学会抄録集、23、2003
- 齋藤奈緒子、今村直江、小塚美加：学生による指導評価から見た実習指導の現状と課題、第34回日本看護学会抄録集、80、2003